

Film Class of 2018

映画の教室 2018

個の紡ぐ物語

2018年10月10日(水)、24日(水)、11月7日(水)、21日(水)、12月5日(水)
全5回、隔週水曜、7:20pm 開始 (約15分の研究員による解説付き)

個人によるさまざまな表現を観る全5回!

映画芸術や映画保存を学ぶ上で重要な作品を、国立映画アーカイブの所蔵作品の中から上映するプログラム「映画の教室」は、テーマに沿った各5回シリーズ・研究員の解説付きです。シリーズを通して観ることで、より一層映画や作品への理解を深めることができます。

映画は、映画館で上映される商業作品だけでなく、個人による作品としても作られてきました。ホームムービーから前衛的な芸術表現まで、目的もスタイルも多種多様です。それら個人による映画には、作り手の個性や意図が、自由に色濃く反映されています。今回の「映画の教室 2018 個の紡ぐ物語」では、戦前のアマチュア映画、研究者による映像、日記映画、女性映像作家の作品、実験映画と、5回にわたってさまざまな視点や表現で制作された16作品を紹介します。個人作家による多彩な作品を観ることができる本特集を、ぜひともご周知いただきますようお願い申し上げます。

5回のシリーズで映画を学ぶ!



■開催概要

企画名: 映画の教室 2018 **サブタイトル:** 個の紡ぐ物語

日時: 2018年10月10日(水)、24日(水)、11月7日(水)、21日(水)、12月5日(水) 各日7:20pm 開始 [7:00pm 開場]

会場: 国立映画アーカイブ 小ホール (地下1階)

定員: 151名 (定員制・全席自由席)

料金: 一般520円/高校・大学生・シニア310円/小・中学生100円/障害者(付添者は原則1名まで)、国立映画アーカイブ及び東京国立近代美術館のキャンパスメンバーズは無料

前売券 9月12日(水)10:00amより、チケットぴあにて全上映回の前売券(全席自由席・各70席分)を販売いたします。

[Pコード: 558-969] 前売料金: 一般520円/高校・大学生・シニア310円/小・中学生100円

「映画の教室」スタンプカード【観覧券は各回別途必要です】:

第1回目(10月10日)の入場時に、「映画の教室 2018 個の紡ぐ物語」のスタンプカードを配布し、各上映日に1つつスタンプを押印します。全5回ご覧いただいた方には、本年度(1月27日まで)の当館主催上映の入場引換券を1枚謹呈します。

掲載用のお問い合わせ先: ハローダイヤル 03-5777-8600

本企画ウェブサイト: www.nfaj.go.jp/exhibition/filmclassof2018-kojin

【本企画に関するお問い合わせ】

国立映画アーカイブ 教育・事業展開室 担当: 碓井、富田、小林

電話: 03-3561-0823 FAX: 03-3561-0830 E-mail: pr@nfaj.go.jp

Film Class of 2018

■プログラム(全5回) *各回、約15分の研究員による解説付き *記載のないものは全て35mmフィルム上映

第1回 10月10日(水) アマチュア映画作家

1923年に日本に9.5mmのペーパーカメラが登場後、アマチュア映画作家が活躍し、ホームムービーをはじめ様々な作品が作られた。既存のレコードに合わせて制作されたレコードトーキー作品『東京行進曲』や、五所平之助の『あこがれ』(1935年)のロケ現場で撮影し、一本の短篇に仕上げた『あこがれ[スタジオF版]』などを上映。

上映作品 (6作品、計53分)

東京行進曲 (3分・白黒・1929年・監督：服部茂) **寂光** (12分・白黒・無声・1930年頃・監督：森紅)
母を迎へて (16分・白黒・無声・1931年・監督：荻野茂二)
あこがれ[スタジオF版] (10分・白黒・無声・1935年・監督：川喜田壮太郎)
夏祭 (8分・カラー・無声・1937年・監督：樹田和二郎)
カムイ 熊神 (4分・カラー・無声・1938年・監督：カワキタソウタロー)



『あこがれ[スタジオF版]』

第2回 10月24日(水) 研究者の視点

「雲の伯爵」と阿部正直は、富士山の雲形と気流との関係をめぐる研究に映画を活用した。動物学者・八田三郎が記録した『白老アイヌの生活』は、当時既に消えかけていたアイヌの生活ぶりを再現したものだという。『イオマンデ』は、アイヌ文化の良き理解者であったスコットランド人医師ニール・ゴードン・マンローが昭和初期に撮影したイオマンテ(熊の霊を送る儀式)の映像を、後にトーキー作品として構成したもの。

上映作品 (3作品、計73分)

昭和十二年八月 富士山の自然美 (3分・16mm・カラー・無声・1937年・撮影：阿部正直)
白老アイヌの生活 (43分・染色・無声・英語版・1925年・監督：八田三郎)
イオマンデ(秘境と叙情の大地で) (27分・白黒・1965年・構成：尾形青天・撮影：ニール・ゴードン・マンロー)



『昭和十二年八月 富士山の自然美』
©福山藩阿部家・豊喰鷹ノ羽

第3回 11月7日(水) 日記映画

日本の日記映画を代表する映像作家であり詩人でもある鈴木志郎康が、カメラを据えて、その日にあったことなどを毎日6分間語る自らの姿を、15日間撮影した。作家いわく、「ある意味では、自分一人で自分の映画を作るという個人映画の極点を実現されてしまった」作品。

上映作品 (93分)

15日間 (93分・カラー・1980年・監督：鈴木志郎康)



『15日間』

第4回 11月21日(水) 女性のまなざし

日本の女性映像作家・ビデオアーティストの先駆者である出光真子による2作品を上映。詩的な映像に重ねて、母の死とそれをめぐるさまざまな言葉が紡がれる『ざわめきのもとで』、女性がアーティストとして活動することの困難が描かれる『加恵、女の子でしょ!』。どちらも、専業主婦をしながら作品を制作し続けた出光による、社会に対する問いかけとも言えるだろう。

上映作品 (2作品、計58分)

ざわめきのもとで (11分・16mm・カラー・1985年・監督：出光真子)
加恵、女の子でしょ! (47分・16mm・カラー・英語字幕付・1996年・監督：出光真子)



『ざわめきのもとで』

©STUDIO IDEMITSU



『加恵、女の子でしょ!』

©STUDIO IDEMITSU

第5回 12月5日(水) スクリーンへの問い

詩人、劇作家、小説家、写真家、競馬批評家、映画監督と数々の肩書を持つ寺山修司。映画においては、スクリーンの意味を問うさまざまな実験を試みた。現存する寺山の最初の映画『檻囚』、カンヌ国際映画祭監督週間に正式招待された、スクリーンをドアに見立てた『迷宮譚』など、計4作品を上映。

上映作品 (4作品、計69分)

檻囚 (11分・16mm・カラー・1964年・監督：寺山修司)
迷宮譚 (16分・16mm・カラー・1975年・監督：寺山修司)
消しゴム (20分・16mm・カラー・1977年・監督：寺山修司)
書見機 (22分・16mm・カラー・1977年・監督：寺山修司)



『檻囚』

©TERAYAMA WORLD



『迷宮譚』

©TERAYAMA WORLD